

# 東京國立博物館藏古筆殘卷「白氏文集卷六十六」の本文について

靜永健

## 一 本邦傳存白氏文集舊鈔本の研究價值

中國と我が國日本の文學交流史上、恐らく最も特筆に價する一項は、唐代、白居易の詩文集『白氏文集』を傳來、受容したことであろう。

その記録は古く、我が國の留學僧惠尊の筆寫せる時點が、白氏のいまだ存命中であったことなどは、まことに快哉を叫びたくなるような誇らしき出來事である。そしてその後、我が國では、周知の如く多くの文人墨客たちが競って「文集」を傳寫し、またこれを熟讀し、或はその佳句を選んで朗詠し、あの華麗なる平安王朝文學の基礎が築き上げられていったのである。

さて、その餘慶の一つとして、今日の白居易研究になお裨益する所少なくないのが、我が國に傳存する幾つかの「舊鈔本文集」、すなわち平安より鎌倉時代にかけて筆寫、鈔録された『白氏文集』である。今その主要なものを擧げれば、およそ次の四種となる。

〔主な舊鈔本白氏文集四種〕

- ・ 神田本白氏文集（卷三・卷四のみ…現京都國立博物館所藏）
- ・ 金澤文庫舊藏本白氏文集

- （卷六・卷九・卷十二・卷十七・卷二十一・卷二十二・卷二十四・卷二十八・卷三十一・卷三十八・卷三十九・卷四十一・卷四十七・卷五十二・卷五十四・卷六十二・卷六十三・卷六十五・卷六十八

…以上は現大東急記念文庫所藏

- （卷三十三

…以上は現天理圖書館所藏

- （卷八・卷十四・卷三十五・卷四十九・卷五十九

…以上は現歴史民俗博物館所藏

- ・ 管見抄（十卷、ただし現在第三卷を缺く。現内閣文庫所藏）

- ・ 要文抄（三冊…現在東大寺圖書館と正倉院聖語藏とに分藏）

これらは現在、白氏文集の底本に選ばれている別集類單行刊本、すなわち南宋紹興年間の《宋本》や江戸初期の《那波本》等よりも來歴が古く、しかもその本文は、ときに唐末五代より北宋にかけての總集類（『才調集』、『文苑英華』、『唐文粹』、『樂府詩集』等）に選録された本文に一致するなど、文集本來のテキストに限りなく近く、極めて良質の本文を保つ例が、數多く見受けられる。

なお以上のことは、今ここに筆者が改めて縷述するまでもなく、花

房英樹氏著『白氏文集の批判的研究』(一九六〇年彙文堂初版、七四年朋友書店再版)、平岡武夫氏・今井清氏主編『(校定本)白氏文集』(全三冊、一九七二)七三年京都大學人文科學研究所)、そして太田次男氏著『舊鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』(全三冊、一九九七年勉誠社)等に代表される數々の優れた先行研究によって、漸次我々の目前に明らかにされてきた事實である。

## 二 文集古筆切の研究價值

然るに上述「舊鈔本白氏文集」について、まことに惜しむべきは、そのいずれを取っても白氏文集全七十餘卷の完全な形を留めるものが存在しないことである。また、言うまでもなく各舊鈔本の本文間にも様々な異同が見られる。従つて我々は、更なる良質の本文を求め、落ち穂拾いの如く孜孜として散逸せる舊鈔本文集の搜索を行わねばならないのであるが、今日この分野においては、まことに幸運にも、その大いなる先達として『平安朝傳來の白氏文集と三跡の研究』を著された小松茂美氏の一聯の研究がある。すなわち「古筆切」中における文集斷簡の調査である。小松氏の成果は既に『古筆學大成』という一大叢書として公刊されており、その第二十五卷にこの「文集古筆切」がまとめられているため、初學者の我々もまず同書に掲載された寫眞版に據りつつ、その調査を開始することができるのである。

さて、『古筆學大成』に收められた文集古筆切の中に、唯一、その實物の長さが九・四メートルにも及ぶ卷子本であるため、前後の一部分の寫眞しか掲載されていない一點が存する。東京國立博物館藏「白氏詩卷」(同博物館列品番號二一九四二)である。

この詩卷は、所謂前集後集形式の白氏文集(四部叢刊本等)では

東京國立博物館藏古筆殘卷「白氏文集卷六十八」の本文について

「卷六十八」、前詩後筆形式の白氏文集(上海古籍出版社排印『白居易集箋校』等)では「卷三十三」に相當する殘卷で、これまで上記舊鈔本(金澤文庫舊藏本等)ではいまだ現存が確認されていない卷である。博物館の記録に據れば、この卷軸は昭和五十年(一九七五)九月に買い上げられたもので、それ以前の所藏者など、過去の來歴は一切未詳とのことであるが、斐紙、無點、端正な楷書、しかも筆致に堂々たる風格を感じさせる鈔本である。ちなみに、この「白氏詩卷」全幅の圖版寫眞は『東京國立博物館圖版目錄/日本書跡篇(和様I)』(一九八九年同館發行)に掲載されているので、参照されたい。

この殘卷が、これまで白氏文集の舊鈔本として學界の注目を浴びることの無かつた理由には幾つかのことが考えられる。まず第一に、この卷軸は殘念なことに卷頭部分が切斷されており、卷頭の標題および冒頭の十數首が逸してしまつてゐることが挙げられよう。現存する金澤文庫舊藏本の體例に據つてこれを復原すれば、本來卷頭第一行には標題「白氏後集卷第六十八」と、文體表示および作品數表示「律詩凡一百首」、そして次の行には署名「中大夫守太子少傅分司東都馮翊縣開國侯上柱國賜紫金魚袋白居易」が記されていた筈であり、續いては「從同州刺史改授太子少傅分司」詩(三三四)より「早春題少室東巖」詩(三三四)に至る十六首を記した紙幅が存在したに違いないのであるが、破損したか、或はより高い可能性としては近世の古筆商によって切斷され賣却されてしまつたために、その冒頭部分(約一メートル分)が存在しないのである。現在この卷子本は、昭和の購入當初より、丁寧に裏打ちが施され、漆塗の美しい桐篋に納められているのだが、その篋蓋上には朱漆にて「平安朝書寫唐詩一卷」の文字が記されてあり、この詩卷が白氏文集の鈔本であることが長らく気づかれぬままであつ

たことが判明する。

また、この卷子本は、縦二七・〇センチメートル、横五〇・八〜五三・〇センチメートルの紙十九葉を繼いだものであるが、他の文集舊鈔本の如く、諸本との異同校注や、聲點、訓讀等の書き入れも無く、また何よりもその没個性な楷書體のために、國語國文學の研究者や書法研究家の考察對象には些か爲り難いものであった。

なお小松氏『古筆學大成』解説に據れば、購入當初、筆寫者を藤原基俊（一〇六〇〜一一四二）とする「小札」が付されていたとのことであるが、二〇〇二年五月、筆者が熟覽した折には存在せず、また小松氏解説の述べるように他の基俊眞跡とされるものと照合するに、恐らく全く別人の手になるものようである。ただし、その筆寫の年代は十一世紀〜十二世紀中葉<sup>③</sup>、すなわち平安末期の寫本であることは、ほぼ誤りないように思われる。

本論文は、この東京國立博物館藏古筆殘卷「白氏文集卷六十六」の本文について、その研究上の價值を考察しようとするものであるが、まず敢えてここに筆者の全體的な結論を述べおくならば、この殘卷は、現在金澤文庫舊藏本等において闕卷となつてゐる「文集卷六十六」のほぼ八割強（八十四／一百首）に當たり、しかも僅々一卷のみながら『白氏文集』の原初の姿を窺い知ることの出来る、まことに貴重な舊鈔本であると判断される。以下、筆者がかかる結論に至る、その根據となつた幾つかの事例を列記してゆきたい。

また、以下本稿では、この古筆殘卷を《東博本》と稱することとする。

### 三 《東博本》本文の正統性

〔例證①〕《東博本》第五番目の詩、すなわち白氏作品番號三五五詩は、現在、宋本・那波本ともに詩題を「春和令公綠野堂種花」に作る（傍點筆者、以下同）。しかし、唐詩の一般例より案ずるに、明らかに《東博本》の「奉和令公綠野堂種花」の文字が正しいであろう。「令公」とは、裴度（七六五〜八三九）をいう。この詩が詠じられた開成元年（八三六）當時、彼は東都洛陽の最高官たる東都留守にあつたが、更に中央において中書令をも兼任していたために、かく敬稱されたのである。裴度洛陽在勤時の邸宅は、白氏の邸宅があつた履道坊の直ぐ西隣の集賢坊内にあり、この前後の白氏文集中には兩者の頻繁な往來を窺う作品が數多く殘されている。また「綠野堂」とは、裴氏が洛陽城南郊に營む別莊（午橋莊）にあつた豪奢な建物をいうのであり、この詩題は「令公の『綠野堂に花を種う』に和し奉る」と訓むべきなのである。以下、筆者の解釋を訓讀によって示しておこう。

綠野堂開占物華 綠野の堂開けば 物華を占む

路人指道令公家 路人 指して道ふ「令公が家」と

令公桃李滿天下 令公の桃李 天下に滿つ

何用堂前更種花 何ぞ用るん 堂前に更に花を種うるを

〔例證②〕白氏作品番號三七六「秋霖中奉裴令公見招早出赴會馬上先寄六韻」という詩題も、諸本みなこの通りであるが、唯一《東博本》のみは次のように異なる。

「秋霖中奉裴令公書見招早出赴會。馬上先寄六韻」

しかし、この詩が詠まれた情況に想いを致せば、兩者の優劣は歴然と

するであらう。

雨暗三秋日

泥深一尺時

老人平旦出

自問欲何之

不是尋醫藥

非關送別離

素書傳好語

絳帳赴佳期

續借去桃花馬

催迎楊柳姬

只愁張錄事

罰我恠來遲

雨に暗し 三秋の日

泥は深し 一尺の時

老人 平旦より出で

自ら問ふ 何に之かんと欲するやと

是れ醫藥を尋ぬるにもあらず

別離を送るに關するにも非ず

素書 好語を傳へ

絳帳 佳期に赴かんとするなり

續けて桃花の馬を借り

楊柳の姫を催迎す

只だ愁ふるは 張錄事の

我を罰するに 來り遅るるを恠るを

すなわちこの詩は、裴度（令公）の宴席に書狀によつて招かれ、いざ赴かんとしたが約束の刻限に間に合わず、その詫び狀として取り急ぎしたためられた六韻十二句であり、《東博本》の題は、他の諸本のものに比べ、より内容に相應しいものとなっている。すなわち、

秋霖中、裴令公の書もて招かるるを奉じ、早に出でて會に赴かんとするも遅れ、馬上に先に寄せる六韻

と訓めるものである。なお、詩の本文についても、第六句「非關送別離」を他の諸本みな「非干送別離」に作るのは、「關」「干」兩字の音が比較的近似することによる後人の安易な略筆を繼承したものと考えられ、もとより《東博本》を是とすべきである。更に、同じくこの詩の第九句「借」字には、《東博本》のみ「去聲」との注が見える。これらの音注については、その各々の解釋、またこれを眞に白氏の原注

とするか否かについて、いまだ定論を見ぬ課題であるが、筆者の愚考するところ、少なくともこの《東博本》におけるこれら音注の存在は、この卷子本が間違ひなく唐代の由緒正しい白氏文集（宋本・那波本等よりも限りなく原本に近いもの）であることの有力な手懸かりとなるように思われるのである。

〔例證③〕上述の二例は、比較的簡明な異同の例であり、《東博本》本文の優位が即座に判断できるものであった。しかし逆に、この《東博本》自體にも鈔錄の過程における様々な筆誤が存在することは否めない。これは残念ながら舊鈔本一般について認められる缺點であるが、今ここに《東博本》一卷における最大の誤寫部分を挙げるとすれば、次の白氏作品番號三三三詩の本文とならう。

《宋本》：三月三日

畫堂三月初三日 絮撲紗窻驚拂簷 蓮子數盃嘗冷酒

柘枝一曲試春衫 堦臨池面勝看鏡 戶映花叢當下簾

指點樓南甃新月 玉鉤素手兩纖纖

《東博本》：畫堂三日

畫堂三月初三日 絮撲紗窻驚拂簷 蓮子數盃嘗冷酒

柘枝一曲試素手兩纖纖

すなわち、本來は《宋本》の如く七言律詩であるべき本文が、途中二十五文字を書き落とし、右のような異文を生じているのである。なお《東博本》にはこの他にも（かかる大幅なものはいずれに見られ無いが）、一〇二文字の範圍内での誤脱や衍文が處々に散見される。ここに舊鈔本の限界を知るべきであらう。

ところで、この三三三詩は、宋本・那波本をはじめ諸本みな「三月三

日」と題している。一方《東博本》は、先に挙げたように詩の第一句をつづめて「畫堂三日」に作る。これは、いずれが正しいか俄かには判断し難い異同と言えるが、ここに極めて興味深い傍證として、我が國の大江維時（八八八〜九六三）撰とされる『千載佳句』の本文が擧げられる。

・蓮子數盃嘗冷酒 柘枝一曲試春衫 白 畫堂三日（春宴部六七）

・階臨池面勝看鏡 戸映花叢當下簾 白 畫堂三月（花水部六〇）

注目されるのは句下の詩題注記である。すなわち、ここにはまさしく《東博本》と同系統の「畫堂三日」（或作「畫堂三月」）と見えていゝ。これは、平安時代、當時我が國に傳えられていた舊『白氏文集』の中に、曾てこのように作る一本が存在していたとの期待を我々に懐かせるものである。そして、このことから類推するに、宋本・那波本など現在通行している白氏文集が「三月三日」に作るの、或は白氏の原作ではなく、逆に中國においての傳寫の間に生じた、後人の隨意な書き改めではないかとの考えも十分成り立つのである。

周知の如く、中國における本格的な書籍出版は宋代に開始された。宋本（南宋紹興年間刊、前詩後筆本）と謂い、那波本（江戸初期刊、前集後集本）と謂い、それらは、宋代に至ってはじめて上梓されたものに基づくのであり、原本白氏文集の成立時點からは、既に二百年ないし三百年を経過したものである。従って、これら刊本にもまた、その原據せる「鈔本」が存在した筈であり、我々はひとり宋本等「刊本」の本文のみを過信することなく、本邦傳存の「舊鈔本」本文および『文苑英華』など「總集類」選錄の本文、そして更にはこの『千載佳句』や『和漢朗詠集』等さまざま本文を、常に等質なものとして比較検討してゆかなければならないのである。

以下、宋本によって補正した三吾詩本文の訓讀を示しておこう。

畫堂三月初三日 畫堂三月初の三日

絮撲紗牖驚拂簷 絮は紗窓を撲ち 燕は簷を拂ふ

蓮子數盃嘗冷酒 蓮子 數盃 冷酒を嘗め

柘枝一曲試春衫 柘枝 一曲 春衫を試む

階臨池面勝看鏡 階は池面に臨みて 鏡を看るに勝り

戸映花叢當下簾 戸は花叢に映じて 當に簾を下すべし

指點樓南翫新月 樓南を指點して新月を玩べば

玉鉤素手兩纖纖 玉鉤 素手 兩つながら纖纖たり

三月三日、そぞろなる舞姫の様子をスケッチした宮體の小品である。

なおここで、この《東博本》の成立情況について、筆者の愚見を付しておきたい。

二〇〇二年五月、筆者が許可を得て熟覽したところ、その紙面には一字として胡粉や朱墨等による誤字訂正、および他本との校合の注記（角筆も含めて）が見られなかった。恐らくこの巻軸は、やはり藤原基俊といった著名文人によって筆寫されたものではなく、當時の專業寫本職人（例えば寺院の寫經生など）の手によって、一氣呵成に書き上げられた卷子本であると思われる。上述三吾詩の如き全く不注意な二十數字の書き落としが生じるのも、かかる推測を裏付けるものである。しかしまた同時に、このことはこの卷子本の文字が（同種の寫本類には往々にして見られる）筆寫者による恣意的な字句の改訂を、殆ど含んでいないことの證左ともなるであろう。《東博本》本文は、幾つかの偶發的な誤寫を含むとはいえ、その價值は些かも減ずるものではないのである。

四 『千載佳句』『和漢朗詠集』本文との一致例

《東博本》の本文は、前節例證③に見えたように、ときに我が國平安期の文獻に一致する例が見られる。すなわち大江維時『千載佳句』であり、またこれに藤原公任（九六六—一〇四一）撰『和漢朗詠集』を加えることができる。次に示す例證④⑤も、従前では『佳句』および『朗詠集』にのみ見える孤立した異文であったために、一説には邦人による恣意的な改訂との見方も提出せられていたものである。しかし、この《東博本》の發見により、一轉して、こちらをこそ白詩の原文と認めるべき可能性が出てきた。今後、日中雙方の文學研究者に廣く検討していただきたい異同例である。

〔例證④〕白氏作品番號三六「香山避暑一絕」其一は、從來の諸本では次のように作るものであった。

六月灘聲如猛雨 香山樓北暢師房 夜深起凭欄干立  
 滿耳潺湲滿面涼  
 ところが《東博本》本文では以下のように異同が生じる。  
 六月灘聲似秋雨 香山樓北暢師房 夜深起憑欄干立  
 滿耳潺湲滿面涼

この異同について『千載佳句』『避暑』部二言に選録された本文を参照すると、まさしく《東博本》本文に合致する。

夜深起憑欄干立 滿耳潺湲滿面涼 白 香山避暑詩發句曰六月灘聲  
 似秋雨香山樓北暢師房

これもまた《東博本》が宋本・那波本等現在通行の諸本よりも優れる事例であり、同時に我が國『千載佳句』に傳わる本文について、そ

東京國立博物館藏古筆殘卷「白氏文集卷六十八」の本文について

の重要性が再確認できる好例と言えるものである。

六月灘聲似秋雨 六月の灘聲 秋雨に似たり  
 香山樓北暢師房 香山の樓北 暢師の房  
 夜深起憑欄干立 夜深く 起ちて欄干に憑りて立てば  
 滿耳潺湲滿面涼 滿耳の潺湲 滿面の涼

なお、通行本「猛雨」よりも「秋雨」が優れるとする根據は、描詠の對象である伊川の水流にある。すなわち白居易は、この詩の結句において、水流の音を再度「潺湲」と表現する。この疊韻字は、傳統的にさらさらと流れる小川の形容や、さめざめと涙垂れる貌など比較的靜かな状態を謂い、「猛雨」とは著しく對應しない文字である。

〔例證⑤〕白氏作品番號三六「池上逐涼」詩は、冒頭第一句に重大な問題がある。これは、まず單行刊本相互にも次のように異同が見られる（×印は明らかに誤字と判斷される異同）。

《那波本》…青苔池上銷殘暑、綠樹陰前逐晚涼  
 《宋本》…青苔地上銷殘暑、綠樹陰前逐晚涼  
 《馬本》…青苔地上消殘暑、綠樹陰前逐晚涼  
 《汪本》…青苔地上消殘暑、綠樹陰間逐晚涼

一方、如上の刊本系統の異同に對し、《東博本》本文は次の通り。

《東博本》…青苔地上銷殘雨、綠樹陰前逐晚涼  
 そして、この《東博本》に一致するものが『千載佳句』『納涼』部と『和漢朗詠集』同じく「納涼」部に選録された左の本文である。

《千載佳句》…青苔地上銷殘雨、綠樹陰前逐晚涼 (二五)  
 《和漢朗詠》…青苔地上銷殘雨、綠樹陰前逐晚涼 (二五)  
 さて、上句「青苔の池上(池のほとり)」か「青苔の地上(苔むし

た地面」かの異同については、以上の舉例を見れば既に明らかなように後者「地上」を是とし、前者「池上」は獨り那波本のみ誤刻(詩題に引きずられたか)と見做すべきであらう。ここで問題にすべきは下句「殘暑」か「殘雨」かの異同である。

《東博本》發見以前、この「殘雨」の異文は、別集單行の各白氏文集いずれにも見えないために、「千載佳句」もしくは『和漢朗詠集』における誤寫、或は本邦文人による意圖的な改作ではないかとする見解が提出されていた。しかし、『東博本』の出現によって、「殘雨」こそが白詩の原作であり、「殘暑」は、本稿がこれまでに指摘してきた①④の例證に同じく、宋刊『白氏文集』における誤刻を繼承したものである可能性が高まった。

青苔地上銷殘雨	青苔の地上	殘雨銷え
綠樹陰前逐晚涼	綠樹の陰前	晚涼を逐ふ
輕履單衣薄紗帽	輕履 單衣	薄紗の帽
淺池平岸庫藤床	淺池 平岸	庫藤の床
簪纓恠我情何薄	簪纓は我を恠らん	「情何ぞ薄きや」と
泉石諳君味甚長	泉石は君を諳んず	「味ふこと甚だ長し」と
遍問交親爲老計	遍く交親に老計を爲さん	ことを問へば
多言宜靜不宜忙	多言ふ「靜宜しく忙宜しからず」と	

なお第一句を「殘暑」とした場合、それは「苔むした庭先に殘暑の苦懷を消し遣らうとして…」とでも解釋すべきであろうが、文脈上、第二句「逐晚涼(夕涼みに出掛ける)」と意味が重複し、詩の構成としても些か劣れるように思われる。やはり「苔むした庭先に夕立ちの雨音もようやく消えたので(＝銷殘雨)、綠の木陰のもと、夕涼みに出掛けた」と解するのが至當である。

### 五 「詠老贈夢得」詩の混入問題

《東博本》最大の問題點は、僅々一箇所ながら、他の諸本と作品の配列が異なる部分があることである。これは現存する金澤文庫舊藏本「白氏後集卷六十五」に關しても新たな問題を提起するものであり、極めて注目される事例である。

〔例證⑥〕白氏作品番號三三三「詠老贈夢得」詩は、從來の通行各本では均しく文集卷六十六の直前、すなわち卷六十五の最後尾に配列されていたものである。しかし《東博本》では、卷六十六末尾より倒數第四首(三三三)「答李徐州」詩と三三〇「長齋月滿寄思黯」詩の間に配列されている。

詠老贈夢得	老いを詠じて夢得に贈る
與君俱老也	君と俱に老いたる也
自問老何如	自ら問ふ「老いは何如に」と
眼澀夜先臥	眼は澀り 夜 先に臥し
頭慵朝未梳	頭は慵く 朝 未だ梳らず
有時扶杖出	時有りて 杖に扶りて出で
盡日閉門居	盡日 門を閉ざして居る
懶照新磨鏡	照らすに懶し 新磨せる鏡
休看小字書	看るを休む 小字の書
情於故人重	情は故人に於いて重く
跡共少年疎	跡は少年と共にするを疎んず
唯是閑談興	唯だ是れ 閑談の興のみ
相逢尙有餘	相逢へば 尙ほ餘り有り

蓋しこの詩は、以下の四つの理由によって、この《東博本》に見える配列こそが『文集』本来の姿であることが立證されるであろう。

(a) 白詩各作品の製作年代を考證するに、文集卷六十五後半部の作品は、おおよそ大和九年(八三五)のものと同断される。しかし當時、この詩を贈られた劉禹錫(字夢得)は、いまだ現役官僚として、蘇州、汝州、そして翌開成元年には同州の刺史を歴任中であり、この詩の冒頭句「與君俱老也」という白樂天の呼びかけには些か不相應な情況にあった。劉禹錫が各地の刺史を勤め上げ、ようやく「太子賓客分司東都」として洛陽での半官半隱の生活に入るのは、開成元年(八三六)秋のことである。従つてこの作品は、まさに《東博本》の配列通り、開成二年(八三七)歳暮とする方が、詩の内容から見ても恰當するのである。

(b) 文集卷六十五には、幸いにも《金澤文庫舊藏本》が傳わっている。そこで、この舊鈔本において該詩が確かに卷六十五に配列されているのかを確認すると、この「詠老贈夢得」詩を鈔録せる料紙のみは、その前後の紙とは全く別葉であり、本来「卷六十五」を鈔出せる紙幅とは別の巻軸に書かれていたものが、後日意圖的にこの「文集卷六十五」の料紙間に繼ぎ合わせられたものであることが判明する。

《金澤文庫舊藏本》文集卷六十五は、その奥書に據れば日本・貞永元年壬辰(一二三二)十月一日、寂有が書寫し、同年十一月二日に「右金吾校尉原奉重」すなわち豊原奉重が比較、同十二日に訓點が施された。そして四年後の嘉禎二年(一二三六)四月廿二日に「唐本」との比較が完了。更に建長四年(一二五二)二月廿二日には「傳下貴所之御本」(僚卷奥書に「冷泉宮」とあり)との校勘移點を施した、と記されている。この都合三回に亘る校勘作業のうち、「詠老贈夢得」

詩補訂が行われたのは、恐らく第二校の嘉禎二年である筈で、その證に、この紙片の繼接部分に、雙方の料紙を封緘するように小筆「摺本此詩有之」六文字が書き入れられているのである。ちなみに「摺本」とは、當時豊原奉重が目睹し得た宋版白氏文集の謂であり、すなわち上記奥書に云う「唐本」、今日はその現存が確認されていない「北宋版白氏文集」を指すと考えられる。従つて、金澤文庫舊藏本白氏文集においても、その當初(貞永元年筆寫校點時)の原本では、この《東博本》に同じく「詠老贈夢得」詩を卷六十六に配していた可能性が極めて高いのである。

(c) なお「詠老贈夢得」詩が、本来卷六十六の當該部分に配列されるべきだ、との指摘は、《東博本》發見以前にも、間接的ながら存在していた。現在、各地に所藏されている《那波本》白氏文集の中には、江戸時代の有識者による詳細な書き入れが殘されているものがあるが、そのうち、筆者の管見の限りにおいても、

東京・尊經閣文庫所藏本

〔天海僧正(？)一六四二〕舊藏本〕

名古屋・蓬左文庫所藏本

〔細井平洲(一七二八—一八〇一)舊藏本〕

東京・慶應義塾大學圖書館所藏本

〔新見正路(一七九一—一八四八)舊藏本〕

の三本には、いずれもこの「文集卷六十六/第二十六丁」の部分に、一本に該詩「詠老贈夢得」が配列されているとの書き入れが見える。これら江戸の校訂者が、果たして實際にどのような白氏文集を見たのかについては、今なお明らかではないが、當時(少なくとも江戸初期までは)、《東博本》と系統を同じくする舊鈔本が、これ以外にも存在

していたことが、臆氣ながらも確認できるのである。思うに、舊鈔本に基づく校勘作業は、常にかかる第二次資料によっても入念な裏付けを行う必要があるであろう。

(d) 「詠老贈夢得」詩が、この《東博本》の通り、まさしく「文集卷六十六」に配列されていたとする第四の根據は、この第六十六卷に収録される作品数にある。那波本・宋本とも、現在この巻の冒頭部分には、「律詩一百首」との作品数表記が見える。しかし各本とも、この巻に實際に収める作品数は、いずれも九十九首（作品番號三三言三三）であつて、まさしく一首分を闕く。推測するに、これは各刊本の基づく白氏文集が「詠老贈夢得」詩を（直前の巻に重複するため）故意に削除したからに他ならない。

従つて、以上(a~d)を要するに、この《東博本》の作品配列は、この僅か五言詩一首の例のみではあるが、原白氏文集の姿を現在に伝えるまことに貴重な舊鈔本であることが證明せられるのである。

## 六 空格と官名表記のあり方

最後に《東博本》を更に特徴づける二つの事例を指摘しておきたい。  
〔例證⑦〕《東博本》には、僅か三箇所ながら、詩題中に意圖的な「空格」が認められる（傍點\*は筆者）。

- ・ 對酒勸 令公開春遊宴（白氏作品番號三九六）
- ・ 送盧郎中赴河東 裴令公幕（白氏作品番號三三六）
- ・ 長齋月滿寄 思黯（白氏作品番號三三〇）

これらは、當時その人物（および現王朝）への敬意の表現として一般に行われていたものであり、白居易の原作では必ずやこのように記されていたと思しきものである。しかし、かかる空白部分は第三者に

よる轉寫を重ねるうちに次第に失われ、また、能う限り印字スペースを節約しようとする後代の刊本にあっては殆ど顧慮されることの無くなってゆく性質のものである。従つてこの《東博本》に、僅か三例ながら、この空白が保存されていることは、この古筆切と白氏原本との近さを推し量る、非常にユニークな指標となるものと思われる。

三例のうち、前二例の相手は裴度であり（本稿例證①参照）、最後の一例は牛僧孺（七七九〜八四七、字思黯）である。二人はともに嘗ての宰相歴任者であり、また、これらの詩歌が作られた時點の前後には東都留守の任にあつた。すなわち、太子少傅分司東都たる白居易にとって、言わば直屬の上司であり、この空格が、間違ひなく原作者の意志によって行われていたものであることが確認されるのである。

〔例證⑧〕原作者白居易の息遣いが身近に察せられる異同としては、更にもう一つ興味深い異同例がある。白氏作品番號三三詩、舊刊本等では明確な詩題が付されていないが、後世の清刊《汪本》において「三月三日祓禊洛濱并序」と題されているものである。ここで注目すべきなのは、その序文の異同である（筆者傍點のうち特に◎部分に注目されたい。なお×印傍點は明らかな誤字部分）。

《宋本》：

開成二年三月三日。河南尹李待價以人和歲稔、將禊於洛濱。前一日、啓留守裴令公。公明日召太子少傅白居易、太子賓客蕭籍・李仍叔・劉禹錫、前中書舍人鄭居中、國子司業裴暉、河南少尹李道樞、倉部郎中崔晉、司封員外郎張可績、駕部員外郎盧言、虞部員外郎苗愷、和州刺史裴儔、淄州刺史裴治、檢校禮部員外郎楊魯士、四門博士談弘謨等一十五人、合宴于舟中。由斗亭、

歷魏堤、抵津橋、登臨汴沿。自晨及暮、簪組交映、歌笑開發、前水嬉而後妓樂、左筆硯而右壺觴、望之若仙、觀者如堵。盡風光之賞、極遊泛之娛。美景良辰、賞心樂事、盡得於今日矣。若不記錄、謂洛無人。晉公首賦一章、鏗然玉振、顧謂四座、繼而和之。居易舉酒抽毫、奉十二韻以獻。座上作

三月草萋萋 黃鶯歇又啼 柳橋晴有絮 沙路潤無泥  
禊事修初畢 遊人到欲齊 金鈿耀桃李 絲管駭鳧鷖  
轉岸迴船尾 臨流簇馬蹄 開於楊子渡 踏破魏王堤  
妓接謝公宴 詩陪荀令題 舟同李膺泛 醴爲穆生攜  
水引春心蕩 花牽醉眼迷 塵街從鼓動 烟樹任鴉棲  
舞急紅腰凝去聲 歌遲翠黛低 夜歸何用燭 新月鳳樓西

《東博本》

開成二年三月三日。河南尹李待價以人和歲稔、將禊於洛濱。前一日、啓於留守中書令晉公。公明日召太子少傅白居易、太子賓客蕭籍、太子賓客李仍叔、太子賓客劉禹錫、前中書舍人鄭居中、國子司業裴憚、河南少尹李道樞、倉部郎中崔瑄、司封員外郎張可續、駕部員外郎盧言、虞部員外郎苗愔、和州刺史裴儔、淄州刺史裴洽、檢校禮部員外郎楊魯士、四門博士談弘謨等一十五人、合宴于舟中。由斗亭、歷魏堤、抵津橋、登臨汴沿。自晨及暮、簪組交映、歌囀開發、前水嬉而後妓樂、左筆硯而右壺觴、望之若仙、觀者如堵。盡風光之賞、極遊泛之娛。美景良辰、賞心樂事、盡得於今日矣。若不記錄、謂洛無人。晉公首賦一章、鏗然玉振、顧謂四座、繼而和之。居易舉酒抽毫、奉十二韻以獻。座上作

三月草萋萋 黃鶯歇又啼 柳橋晴有絮 沙路潤無泥

東京國立博物館藏古筆殘卷「白氏文集卷六十八」の本文について

禊事修初畢 遊人到欲齊 金鈿耀桃李 絲管駭鳧鷖  
轉岸迴船尾 臨流簇馬蹄 開於楊子渡 踏破魏王堤  
妓接謝公宴 詩陪荀令題 舟同李膺泛 醴爲穆生攜  
水引春心蕩 花牽醉眼迷 塵街從鼓動 烟樹任鴉棲  
舞急紅腰凝去聲 歌遲翠黛低 夜歸何用燭 新月鳳樓西

開成二年(八三七)三月三日、白居易は東都留守裴度(中書令・晉國公、例證①⑦に既出)を筆頭とする洛陽の名士十七名の一人として、洛陽皇城の東南端にあった斗亭を起點に、魏王堤、そして市街の最も中心となる天津橋下に至る間に船を泛べ、妓女樂人とともに盡日優雅な船遊びに興じた。この詩は、その豪奢な遊宴を記念する五言二十四句の壯麗な長篇詩であるが、更に目を引くのは冒頭に歌詩の字數を上回る二百五十數字の序文が飾られていることである。文集卷六十八中、白氏渾身的一篇である。

さて、ここにおいて注目すべき異同は、序文冒頭、十數名の参加者を列記する中の「蕭籍・李仍叔・劉禹錫」三名の官名表記である(東博本◎傍點部)。右に挙げた宋本ほか他の諸本では皆、筆頭の蕭籍の名の上のみ「太子賓客」四字を冠し、後の二人の上には官名が省略されている。しかし唯一《東博本》のみは、後續の二名にもそれぞれ敬意をはらい、一人ずつ丁寧に「太子賓客」の官名が記されているのである。思うに、個々の官位は、本来おさなりに省略されるべきものではなく、この一事を以てしても、この《東博本》がまさしく白居易の原本を彷彿とさせるに足る實に貴重な文獻であることが立證されるのである。

以上本稿は、まことに蕪雜ながら、東京國立博物館の所藏品のうち、これまで餘り重要視されて來なかつたと思われる古筆切白氏文集につ

き、私見を述べた。願わくは、本稿がその一端緒となり、本邦に傳存していながらいまだ各蒐集家の筐底深く眠っている多くの唐詩舊鈔本およびその古筆斷簡に、新たな光が當てられることになれば、筆者にとって無上の喜びである。

注

- (1) 天台留學僧惠尊(還俗名空無)が唐會昌四年(八四四)蘇州南禪院において白氏文集を筆寫したことは、現存する金澤文庫舊鈔本白氏文集のうち、卷十二、卷三十一、卷三十三、卷四十一、卷四十九、卷五十二、卷五十九の七卷、更に現在東京尊經閣文庫藏那波本白氏文集(天海藏)の卷十一、卷十三、卷五十の三卷の書き入れ、更に名古屋蓬左文庫藏那波本(細井平洲舊藏)の卷四十四の書き入れ、加えて京都陽明文庫藏那波本卷二十五の書き入れ(筆者未見)、金子彦二郎舊藏那波本卷二十の書き入れ(筆者未見)の、併せて計十三卷の白氏文集奥書に見える。平岡武夫氏「白氏文集の金澤文庫本・林家校本・宗性要文抄本・管見抄本について」(『神田博士還曆記念書誌學論集』一九五七年平凡社)を参照。なお陽明文庫本卷二十五卷末の書き入れについては全國漢文教育學會『新しい漢字漢文教育』第二十九號(一九九九年十一月)の口繪「漢籍善本紹介——陽明文庫(2)——」(解説松尾肇子氏)に寫眞が掲載されている。
- (2) 白氏文集が、その成立當初および我が國平安期において、單に「文集(ぶんしゅう)」と呼ばれていたことは、太田次男氏の大著『舊鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』(一九九七年勉誠社)上冊第二章第一節「その受容を纏る諸問題」を参照。
- (3) これら四種の舊鈔本のうち、神田本と金澤文庫舊藏本については、太田次男氏・小林芳規氏『神田本白氏文集の研究』(一九八二年勉誠社)、川瀬一馬氏監修解説『金澤文庫本白氏文集』(全四冊、一九八三年〜八

四年勉誠社)、花房英樹氏解説『天理圖書館善本叢書/文選・趙氏集・白氏文集』(一九八〇年八木書店)、佐藤道生氏・後藤昭雄氏解説『國立歷史民俗博物館藏貴重典籍叢書二十一漢詩文』(二〇〇一年臨川書店)を参照。

- (4) 本稿にいう「宋本」とは、臺灣藝文印書館印行『白氏長慶集』(全三冊、一九八一年再版)を指す。《那波本》とは四部叢刊初編所收那波道圓翻朝鮮古活字本白氏文集を指す。またその他、明代の代表的刊本として《馬本》(明・馬元調萬曆三十四年二杏刊本、一九七九年臺灣聯經出版事業公司『全唐詩稿本』39〜42所收、および一九七四年汲古書院『和刻本漢詩集成唐詩』9〜10所收)、清代の代表的刊本として『汪本』(清・汪立名康熙四十二年二七三刊本、四部備要所收『白香山詩集』)を使用した。
- (5) 白氏文集の諸本を校勘する際、まず

A、我が國の舊鈔本系統

B、『文苑英華』等總集類系統

C、宋本・那波本等單行刊本系統

- の三種類に大別し、その三系統をそれぞれ一つのまとまりとして比較検討すると、その作業に比較的混亂が少ないように思われる。これらは一見するに各本の所藏地による區別(日本…A、中國…B C)に近いが、本質的には鈔出時期(唐五代〜北宋…A B、南宋以降…C)の別に基づく。また、B總集類系統の中に敦煌出土『元白詩抄』(ペリオ番號四三三、舊番號四四〇)を加えてよいであろう。この敦煌出土の文集本文に關しては太田次男氏「フランス國立圖書館所藏『敦煌本元白詩抄』について」(成田山佛教研究所紀要第十九號、一九九六年)を参照すべきである。
- (6) 一九六五年墨水書房のち加筆訂正版が『小松茂美著作集』(その1〜3、旺文社一九九六〜九七年)に收められた。
- (7) 講談社一九九三年。

(8) 現在筆者は、同博物館より許可を得て、本「白氏詩卷」の全圖版とその翻刻とを、『白居易研究年報』第四號(二〇〇三年中出版豫定)に掲載の豫定である。

(9) 本詩卷に對應する《那波本》卷六十六、および《宋本》卷三十三、《馬本》卷三十三に據る。

(10) 《金澤文庫舊藏本》卷六十八(現大東急記念文庫藏)の卷頭署名に基づく。

(11) 白居易の各作品の作品番號については、花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』所收の「綜合作品表」の番號に據る。

(12) また《東博本》は、卷末にも「尾題」が無く、「歲除夜對酒」詩(三三三)の直後、全く唐突に料紙が途切れている。この部分も後人の切斷の可能性がある。

(13) 小松茂美氏『古筆學大成』第二十五卷の解説(三〇二頁)に據ると「筆者を藤原基俊とする小札が付屬するが、たれの鑑定とも知れない。基俊の自署をとまなう「多賀切本和漢朗詠集」一幅(陽明文庫藏)と比較すると、明らかに異筆である。小さな字粒をつらねた書風は、十二世紀半ばころの書寫本なることを示す」という。一方『東京國立博物館圖版目錄』では、この古筆切の書寫年代を「平安時代十一世紀」と記している。

(14) 本稿に挙げる「白氏文集卷六十六」は先にも述べた通り『古筆學大成』所掲の一本であるが、「古筆切」との通稱に従うには些か大部のものであるため、論題では「古筆殘卷」と冠稱した。

(15) なお諸版本のうち清刊『注本』のみは既に「奉和……」に改めている。また本文に後述するが(第五節c)本邦に傳存する《那波本》白氏文集のうち、江戸期の書き入れを有する名古屋市蓬左文庫本(細井平洲手澤本)と慶應義塾大學本(新見正路手澤本)の二本には欄外に「春作奉」の書き入れが見える。

東京國立博物館藏古筆殘卷「白氏文集卷六十六」の本文について

(16) 市原亨吉氏「東都留守時代の裴度の生活」(東方學報京都第三十六冊一九六四年京都大學人文科學研究所)参照。

(17) ちなみに『廣韻』に據れば、「關」字は上平聲二十七刪韻・古還切、「干」字は上平聲二十五寒韻・古寒切である。なお、我が國江戸初期の《那波本》のうち、名古屋市蓬左文庫所藏のもの(細井平洲舊藏)と慶應義塾大學圖書館所藏のもの(新見正路舊藏)には、「干」字右脇に「關」字が書き入れられており、また詩題にも「書」字が書き入れられている(殘念ながら「遲」字は見えない)。

(18) 《東博本》には、都合六箇所に音注が見られる。すなわち三三三詩「續借去桃花馬」、三三三詩「水南地空聲多明月」、三三六詩「兩衙但平不闕」、三三二詩「盃盞喜喜經過」、三三三詩「舞急紅腰緩聲」、三三三詩「醉依鳥背香枕坐」。ちなみに、これらを《宋本》と對校すると、三三六詩「借、去聲」を除く五つの音注が重複する(なお《宋本》のみ存在し、《東博本》に見えぬ音注として三三三詩「請平錢不早朝」がある)。白氏文集の音注に關しては、國赫彰氏「從白居易作品里的自注音論因聲別義」(中國・南開學報一九八四年第五期)、柏谷嘉弘氏「白氏文集の音注」(神女大國文第9號、一九九八年、神戸女子大學國文學會)の二篇の先行論文があることを、筆者は國學院大學の赤井益久先生、および鹿兒島縣立短期大學の長谷部剛氏よりご教示いただいた。また、「借、去聲」の音注に關しては、許山秀樹氏「借」の二つの讀音について(中國詩文論叢第二十集、二〇〇一年早稻田大學中國詩文研究會)が參考になる。ただし、これら白氏文集の音注に關しての私見は、別に稿を改めて論じたい。

(19) 『千載佳句』の底本としては、金原理氏解説『在九州國文資料影印叢書1/新撰萬葉集・千載佳句』(一九七九年今井源衛先生華甲記念同叢書刊行會)および後藤昭雄氏解説『國立歷史民俗博物館藏貴重典籍叢書二十一漢詩文』(二〇〇一年臨川書店)を使用。また、佳句の作品番號は金子彦二郎氏『平安時代文學と白氏文集』句題和歌・千載佳句研究

篇」(一九四三年培風館)に據る。

(20) なお東京尊經閣文庫と名古屋市蓬左文庫および慶應義塾大學圖書館に所藏せる《那波本》には、いずれも「晝堂三日」と題せる一本が存在するとの書き入れが見える。《東博本》本文を支持する有力な手懸かりとなろう(この三本については次の第五節に詳述)。

(21) 周知の通り、三月三日は曲水流觴の賜宴が催されるべき節日である。しかし本稿審査の過程で、この白詩が詠じられた開成元年(八三六)は、三月十三日に延期している(『唐會要』卷二十九「節日」に引く開成元年二月京兆尹歸融の上奏)とのご教示を得た。深く筆者の不明を恥じつつも、ゆるがせには出来ない重要な指摘であるため、ここに注記する。歸融上奏の理由は『舊唐書』卷一四九歸融傳にも見ゆ、この時二人の公主の降嫁が重なり府司の公務が輻輳しているためとしているが、『舊唐書』文宗紀下に據ると、二月乙亥(五日)夜四更、京師に地震、「屋瓦皆墮つ」状態であったとの記録が見える。あるいはかかる震災後の復舊作業のための延期ではなかったか。

なお改めて本稿に掲げる白氏「三日」の詩を見れば「柘枝一曲春衫を試む」など、果たして遊宴の延期を暗示するかのような表現が見出される。

(22) 『楚辭』九歌「湘夫人」に「荒忽として遠く望み、流水の潺湲たるを觀る(荒忽兮遠望、觀流水兮潺湲)」と。また同「湘君」に「涕を横流して潺湲たり、君を隱み思ひて階側す(橫流涕兮潺湲、隱思君兮階側)」と。なお一本「似秋雨」との書き入れが、名古屋市蓬左文庫と慶應義塾大學圖書館とに所藏せる《那波本》に見える。

(23) 三木雅博氏『平安詩歌の展開と中國文學』(一九九九年和泉書院)所收「雨後の爽涼——白氏文集詩句の改變と新しい自然詠の誕生」。

(24) なお一本「殘雨」との書き入れが名古屋市蓬左文庫と慶應義塾大學圖書館とに所藏せる《那波本》に見えるほか、藤原定家・慈圓・寂身三人

による句題和歌『文集百首』に引かれる本文も、まさしく「殘雨」に作る。後者のことは、神應徳治氏の論文「國書所載の漢籍の本文について——『文集百首』を中心として——」(二〇〇二年創文社『中國讀書人の政治と文學』所收)によってご教示いただいた。

(25) 花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』(一九七四年朋友書店)、朱金城氏『白居易年譜』(一九八二年上海古籍出版社)、羅聯添氏『白樂天年譜』(一九八九年臺灣國立編譯館)を参照。

(26) 劉禹錫は、大和五年(八三一)十月より蘇州刺史(六〇歳)となり、同八年(八三四)七月、汝州刺史に轉任(六三歳)。翌九年(八三五)十月、同州刺史に轉任(六四歳)。翌開成元年(八三六)秋、六五歳まで赴任していた。

(27) ちなみに花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』の作品繫年も、卷六十五所收の詩の中で、この作品のみを、いみじくも開成二年に繫年する。

(28) 川瀬一馬氏監修『金澤文庫本白氏文集』その第四冊(一九八四年勉誠社)の一六六―一六七頁に掲載された寫眞を参照されたい。料紙の色、上下の墨界の幅などから明らかに補訂であることが確認される。なお、筆者は二〇〇三年一月十八日、所藏する大東急記念文庫を訪れ、許可を得て實地に目録調査した。

(29) 大東急記念文庫所藏の豊原奉重校本(すなわち金澤文庫舊藏本)のうち、「文集卷四十七」(策林三)の奥書部分に、同じく「建長四年二月十二日傳下貴所之御本重移點了」との校勘記録があり、その「貴所」字の右脇に「冷泉宮」との朱筆書き入れがある。また「白氏後集卷五十二」の奥書部分にも、同様に「建長四年二月廿七日傳下貴所之御本重移點了」とあり、ここでは「貴所」字の左脇に「冷泉宮」の朱筆書き入れがある。

(30) なお三本のうち尊經閣文庫所藏本の「白氏文集卷六十六」卷末餘白部分に「本云大治五年十一月十日以式部大輔敦光本息男邦光點了抄了」との書き入れがある。すなわちこの尊經閣本の校注は、大治五年(一一三

○)に藤原邦光が父藤原敦光所藏本より筆寫せる一本に基づいて書き入れられたと考えられる。

(31) 宋本・那波本・馬本による。清刊の汪本(《白香山詩後集》卷十四)のみは「律詩凡九十八首」(實際には九十九首の誤算)とする。これも「詠老贈夢得」詩を缺くためである。

(32) では何故「詠老贈夢得」詩が卷六十五に移し替えられたのかについては、今少し検討を要する。これについては、別稿を用意して私案を呈したい。

(33) 現在この「空格」が残存するのは、白氏文集舊鈔本のうち、金澤文庫舊藏本、管見抄の二本。そして敦煌本「元白詩抄」のみ。

(34) 斐度が東都留守の任にあったのは、大和八年(八三四)三月より開成二年(八三七)五月まで、牛僧孺はその後任として、開成三年(八三二)九月まで在した。

(35) この作品は、五代後蜀・韋穀『才調集』に収録されており、「被禊日遊于斗門亭」(四部叢刊本)或は「三月三日祓禊洛濱」(明崇禎元年毛晉汲古閣刊本)と題する。汪立名校本の詩題は、この汲古閣本才調集に據るか。なお《東博本》のこの詩の中に見える音注「凝、去聲」は、《宋本》にも一致するが、上記『才調集』の二本いずれにも見えない。この音注が唐代の鈔本より出るものである可能性が益々高まった。

(36) なお本文第五節(c)所掲の《那波本》白氏文集の書き入れ本のうち、蓬左文庫本と慶應義塾大學本の二本には「李仍叔・劉禹錫」二人の人名の右脇にそれぞれ「太子賓客」との書き入れが存する。

〔附記〕本殘卷《東博本》の調査に際しては、これを所藏せる東京國立博物館より多くのご便宜を圖っていただきましたことを、ここに鳴謝致します。

東京國立博物館藏古筆殘卷「白氏文集卷六十六」の本文について

また本稿は、二〇〇二年十月十三日、東北大學で開催された日本中國學會第五十四回大會の第三(書誌・校讎學)部會における口頭發表をまとめたものである。司會の下定雅弘先生をはじめ多くの先生方から貴重なご教示を賜りましたことを、ここに感謝致します。